

支部活動

九州支部

□第34回

日本肺癌学会九州支部会

平成6年8月25日(木)・26日(金)
 鹿児島東急イン
 当番幹事 大山 勝
 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉
 科学教室)

1. 原発性肺癌との鑑別が困難であった器質化肺炎症例の検討

長崎大第1外科 田村和貴
 赤嶺晋治, 澤田貴裕, 白藤智之
 松尾 聡, 井手誠一郎
 新宮 浩, 高橋孝郎, 岡 忠之
 辻 博治, 原 信介, 田川 泰
 川原克信, 綾部公認, 富田正雄
 1990年4月から1994年3月までの4年間に、原発性肺癌との鑑別が困難であった器質化肺炎の5例を経験した。腫瘍はいずれも肺野末梢に存在し腫瘍径3.0cm以下と小型であったが、5例中4例に咳嗽・喀痰など先行する肺炎の既往を疑わせる症状を認めており、詳細な病歴の聴取が重要であると思われた。胸部CT所見上、spiculation, notchingなどの所見を呈し原発性肺癌との鑑別は困難で、確診のための診査開胸が必要と考えられた。

2. MR・T2強調像にて低信号の成分を有す縦隔腫瘍の検討：特に鑑別診断における有用性に関して

九州大放射線科 坂井修二

村山貞之, 村上純滋, 添田博康
 増田康治

当院にてMRI検査を受け手術もしくは生検にて組織の判明した縦隔腫瘍の63例についてMRI画像を再検討した。そのうちT2強調像にて低信号の成分がみられた34例に関して、同成分を点状、線状、結節状に分類しCTおよび組織との対比を行った。34例の組織診断の内訳は胸腺腫10例、胸腺癌5例、奇形腫を含む胚細胞腫5例、神経原性腫瘍5例、その他4例である。今回の検討では、胸腺腫と胸腺癌の鑑別診断における有用性が示唆された。

3. 肺癌検診読影医間におけるd, e判定の認識の相違—アンケート調査に基づいて—

熊本市民病院呼吸器科

田中不二穂, 志摩 清
 熊本中央病院 絹脇悦生
 熊本県成人病予防協会

清田幸雄
 熊本県成人病予防協会の肺癌検診に従事する読影医48名にアンケート調査を行い、更に平成5年度発見肺癌の二重読影、合判定結果から、d, e判定には読影医間の認識の相違があり、D判定からの肺癌発見(36%)が少なくなかった。

4. 3 cm以下の肺小結節影のCT診断

鹿児島大放射線科 向井浩文
 森山高明, 野口一成, 中條政敬

同 第1外科 下高原哲朗
 西島浩雄

肺野3 cm以下の結節影73例(良性41例, 悪性32例)のCT所見をretrospectiveに検討した。結節影の長径は、悪性例が有意に大きく、辺縁の性状は悪性例に不整なものが多く、Pleural indentation, Spiculation, 脈管関与、細気管支関与については、悪性例で関与が有る例が有意に多く、石灰化は良性例に有意に多かった。

5. 肺癌における胸腔洗浄液細胞診と洗浄液CEA値について

佐世保市立総合病院外科

糸柳則昭, 中村 譲, 南 寛行
 窪田英佐雄, 石川 啓
 梶原啓司, 赤間史隆, 寺田隆介
 日高重和

肺癌手術症例78例に胸水洗浄細胞診と胸水CEA測定を施行し、19例(24.4%)が細胞診陽性。組織型は腺癌が13/41症例(31.7%)に、扁平上皮癌は2/24例(8.3%)が陽性。P, s-T, tとの間に統計学的有意差を認めしたが、n因子との間には認めなかった。陽性群は胸水中CEA値、血中CEA値とも有意に高値を示した。予後は8例が再発し、そのうち4例が癌死、うち2例が胸膜再発によるもので、10例が再発なく生存(7-28M)。

6. 肺癌における血清中soluble cytokeratin 19 fragment(CYFRA 21-1)の臨